フランス語 E- ラーニング教材の拡充

―反転授業等の可能性をめぐって―

柳　光子

愛媛大学法文学部

Developing E-learning materials for French language education:

Trials of new methods including flipped classroom

Mitsuko Yanagi

Faculty of Law and Letters, Ehime University

はじめに

本稿は平成 28 年度「愛大 GP」に採択され，筆者とモヴェ・エリック教員（共通教育センター）とで 2 年間にわたり取り組んだプロジェクト[1]を振り返り，フランス語初級文法クラスむけに開発した反転授業用の教材と，フランスで作成・提供されているオンライン教材への橋渡しを目的とする，2 年次以降の学習者むけの教材とを中心に報告するものである。年度ごとのポスターセッションや報告書には書ききれなかった部分を補った総括でもあるが，筆者が担当するクラスで提供されたものに限定した報告であることをお断りしておく。

順序としてまずプロジェクト全体の背景と目的を示したのち，新たに実施した取り組みを初年度クラス用，2 年次以降クラス用の順に振り返り，アンケート結果などを踏まえて成果の検証を試みる。そこから明らかになる利点と問題点を整理したうえで，継続とさらなる展開のための考察を加え，E- ラーニングによるフランス語教育の将来計画についても検討しておきたい。なお，平成 26 年度「愛大 GP」採択プロジェクトにより開発した，文法の補足説明や練習問題等の教材ならびに仏検対策教材等についても引き続き追加や修正をおこなったが，それらについては既に報告ずみの内容と重複する部分が多いことから割愛した[2]。

1. E- ラーニング教材拡充の背景と目的

平成 28 年 4 月の改組とカリキュラム改変ならびにクォーター制導入に伴い，それまで共通教育科目の初修外国語として通年開講されてきた「フランス語Ⅰ・Ⅱ」は，法文学部においては専門教育科目という位置づけになり，「基礎フランス語 1 ～ 4」が実施されるようになった。愛媛大学「学士基礎力」の一端である外国語の基礎的運用能力の養成という目的はもちろん，内容やレベルも従来の授業を踏襲するものではあるが，クォーターごとの成績評価すなわちテストの実施が必要となり，新たな文法事項を教えることに割くための時間が実質的に少し減ってしまう。このため，過去に開発してきた E- ラーニング教材の使用を継続するだけでなく，授業の効率化や受講生の時間外学習の増量に直結する手だてを講じる必要が生じたが，これを E- ラーニングの拡充により実現できれば，むやみに授業のスピードを上げずに済むことが予想された。

そこで試行することに踏み切ったのが，反転授業の部分的な導入である。過去 2 年間のアンケート調査からも，学生たちの E- ラーニングに対する抵抗感が年々減っていることが感じられていたため，反転授業もじゅうぶん実施可能とは思われたが，初修の外国語であることを考慮すると慎重にならざるを得ないうえ，先行の実施例も見当たらず完全に手探り状態での実験的な試みとなった[3]。

2 年次以降の学習継続者に対しても，従来より提供してきた仏検対策を主眼とする E- ラーニングに加え，語学研

修や留学に備えることまで視野に入れた強力な学習支援をおこなう必要性が感じられた。主として初学者を対象とした過去２年間のプロジェクトを発展させる形で，初年次よりE-ラーニングに親しんできた学習者たちが自主的な学びを継続し，「すべてフランス語」の環境に臆せず飛び込んでいくための支援を実現することが新たな目標として加わったことになる。

短期長期の語学研修や留学などの海外体験を推奨・支援する全学的な体制の成果か，テロ事件などの影響は思いのほか少なく，フランス語を２年次以降も継続して学習する学生の多くが現地研修や留学を希望している。過去のE-ラーニング教材開発のプロジェクトにおいても，できるだけ早い段階から教員以外の話すフランス語に触れさせるために，フランス語を母語とする留学生たちの協力を得て音声教材・動画教材を提供してきたが，やはり現地での実体験の代わりにはなり得ない。現地に赴き語学学校という外国人学習者むけの環境から一歩そとへ出ると日常生活にも不自由したあげく自信喪失する，という経験もそれなりに有意義ではある。学習意欲を大いに刺激されて帰ってくる学生も多いが，出発前に「すべてフランス語」の世界を疑似体験することは事前の訓練として有用であり，また経済的な事情から現地へ行くことが叶わない学習者にとっては身につけた語学力を鍛錬する貴重な場となりうるはずだ。

具体的な方法として事前に想定していたSkype 等を介しておこなう協定校との交流授業が時差問題等を克服できず先送りするほかなくなったため，プロジェクト期間内で実現可能な代替措置として，現地で作成され世界に向けて提供されているオンライン教材を利用することにした。丸投げするのではなく，まだ２年目の学習者でもスムーズに有効利用できるようにするための「橋渡し」をE-ラーニングにより実施することが当面の目標となった。

２. 反転授業の試み

反転授業とは大雑把に言えば「授業」と「宿題」の役割を反転させた授業形態であり，2010 年頃から欧米で注目を集めるようになったと言われている[4)]。教育・学習の場にICT を活用できる環境が浸透したことが背景にあるのは言うまでもなく，日本でもアクティブ・ラーニングの充実を目的とした反転授業が教育改革のキーワードとして注目されるようになった。しかし筆者自身もFD 講習会等でその一端に触れる機会こそあったものの，ゼロから学びはじめたばかりの外国語学習に導入することが可能とは当初まったく考えていなかった。上述したように，クォーター制への切り替えによりテスト実施に割く時間が増えたことに対処する必要に迫られたことが，取り組みの動機である。

長年にわたり当然の形態と考えてきた「教室での解説ののち，練習問題を宿題として課す」というパターンを反転させる授業なので，具体的にはE-ラーニングにより事前に新たな文法事項を学ばせておき，授業で練習問題を解かせつつ（ここで短時間ながらグループ学習の時間を設ける），復習を兼ねた解説をおこなう，という形になる。導入はかなりの冒険とも思われたが，事前学習の教材を受講生が繰り返し参照できるという利点も大きい。復習用の教材として，さらには欠席した場合に遅れを取り戻すための教材として，非常に有用となることが容易に想像された。初級文法の授業では各回で新たに学ぶ事項が多いため，１度の欠席で取り返しがつかなくなる例は珍しくない。その対策として万全なものとするには網羅的に反転授業用のコンテンツを作成する必要があり，すぐに実行しようとすれば無理があるが，数年をかけて積み重ねていくことで将来的には大半の内容をカバーするものに仕上がる可能性があるだろうとの期待もあった。

教材作成にあたり，スライドや動画などの形態も考えられたが，試行にあたってはMoodle 上での「ページ」を幾つか作成し，番号順に参照させる形をとった（図１）。つまり原則として文章による解説をおこない，適宜，図などを添えるほか，画像や音声を含むWebサイトへのリンクを貼る程度の内容となる（図２）。むろん文字だけでの解説も可能ではあるが，教員の肉声による解説に近づけるためには，これらの「味つけ」が重要であるうえ，内容を印象づけるためにも有用と考えられる。このため作成には予想以上に多大な時間を要した。計っていたわけではないので正確なところは言えないが，通常の授業１回分に対し，少なく見積もっても５倍程度の時間がかかったように思う。

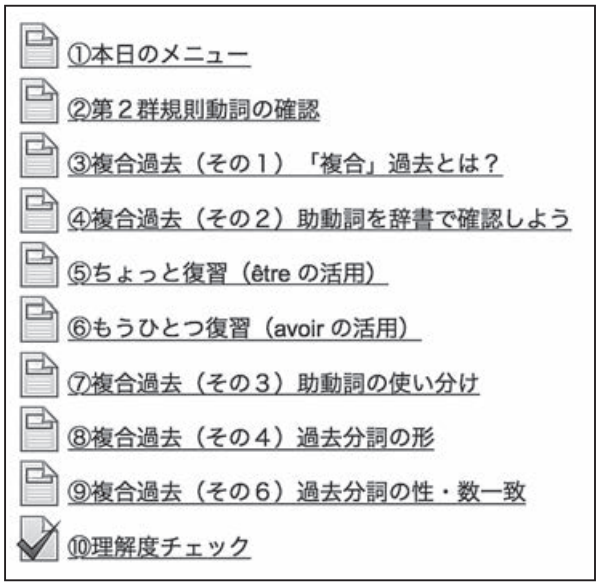

図１　反転授業用教材（10 月）

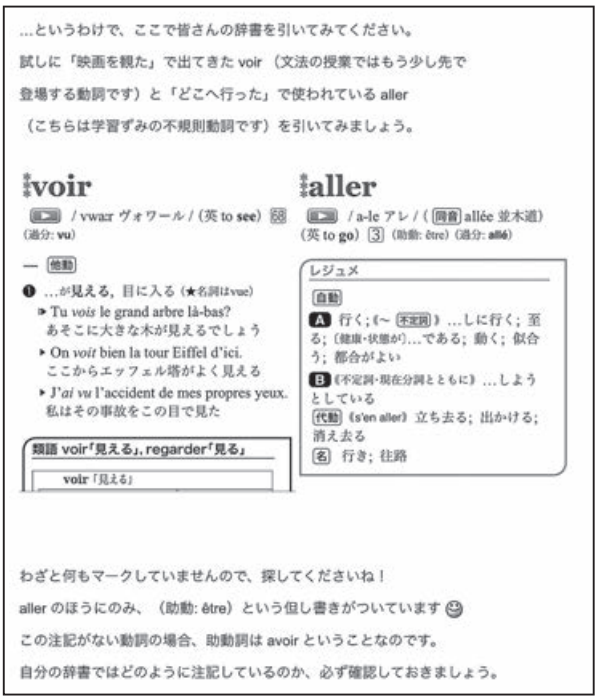

図２　辞書の画像を用いた解説

当然のことながら，わざわざ反転授業にするメリットが少ない学習事項もあり，何を対象とするかを厳選する必要もあった。学習者がマイペースで取り組めることから，難易度の高い項目であること自体は大きな支障とはならないが，頻繁に既習の内容に戻って確認しなければならない項目は不向きであるし，せっかく E- ラーニング利用の形をとるのであれば，学習者の記憶に残る事例を挙げやすい内容が好適となる。実施した内容のなかでは，「前置詞と定冠詞の縮約」に関連して「A さんは B 国でプレーしています」「C さんは D 国の出身です」といった定番の例文に，そのとき話題を集め注目されている人物を当てはめ，関連画像等へのリンクを貼った教材が受講生の印象に残ったらしい。繰り返し参照された形跡があり，試験前に質問に来た受講生が「田中将大の問題で…」と切り出したこともあった。縮約云々という文法用語が出てこなくても，画像と結びついた例文は記憶に刻まれていたのであろう。市販の教科書でも常套の手段であるが，E- ラーニング利用ならば，最新の話題に結びつくものと差し替えることが容易であり，それによって例文が古びてしまうことを回避しつつ，自分がいま受講している授業用にわざわざ作られたものであると印象づけることもできる。

平成 28 年度は試作した教材を「次回までに参照し予習しておくように」と指示して手応えを見る程度にとどめたが，本格的に導入した平成 29 年度には年間で全 30 回中，6 回の反転授業を実施した。ひとつのコンテンツが長くなりすぎないよう文法事項を幾つかに分け，「理解度チェック」テストを添えたほか，楽しみながら学習事項を確認するための応用教材を加えた回もある（図 3，4）。「理解度チェック」には学習を強制する目的もあり，成績評価の対象となることを強調した結果かもしれないが，視聴率はほぼ 100% に近く，そこまで辿り着かなかった少数の例についても，ログを参照すると閲覧はしており，時間切れとなったケースが大半であると推察された。

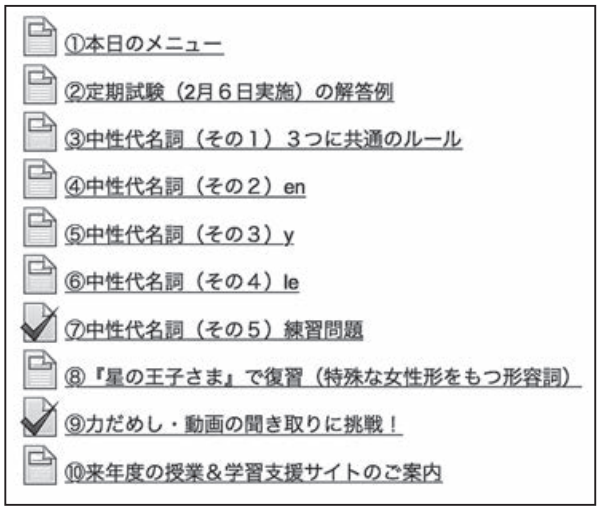

図３　反転授業用教材（２月）

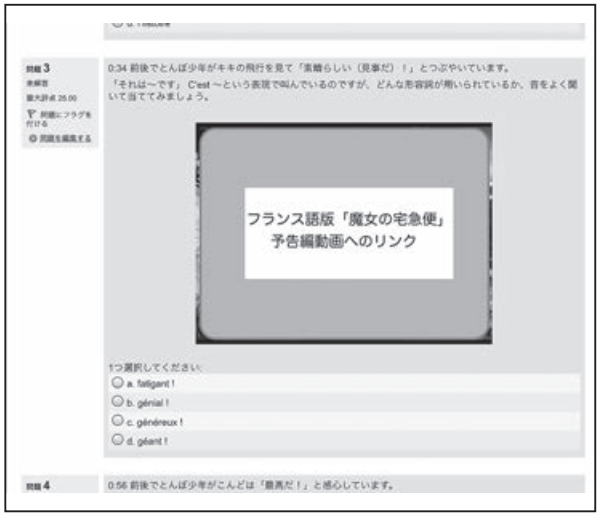

図４　動画を使った聞き取り練習教材

実際に受講した学生たちの反応については，Moodle を用いて年度末に実施したアンケートの結果を挙げておく。「反転授業についてどのように感じたか，当てはまるものをすべて選んでください」という設問に対しては，次の回答が得られた。

「理解しやすかった」: 17%
「理解するのが大変だった」: 10%
「新鮮で興味を持って取り組めた」: 17%
「繰り返し学習できて便利だ」: 22%
「マイペースで進められて便利だ」: 26%
「慣れていないので戸惑った」: 7%

尋ねかたや選択肢にももっと工夫が必要であったと思われるが，強制的に利用させた割にはさほどの抵抗感はなく，マイペースで学習できること，繰り返し学習できることのメリットを感じ取った学習者のほうが多かったと言えそうだ。端的に「反転授業をどのくらい受けたいと思いますか」と尋ねた設問に対しては次の結果となり，評価は分かれたものの，全面的に拒否感を覚えた学生は1割以下であったと見てよいだろう。

「頻繁におこなわれることを希望する」：16%
「ときどきおこなわれることを希望する」：34%
「たまにならあってもよい」：44%
「受けたいとは思わない」：6%

自由記述のコメントとしては，「予め自分のペースで学べるのでよかった」，「授業内容を何度でも見直せるところが個人的にはかなり好き」，「高校でやっていた授業と同じスタイルだったのでやりやすかった」，「一人で自主的に予習するよりも課題を与えられ，しかもスマートフォンでバイトの休憩時間にも取り組めるので便利だった」などの好意的な感想が見られ，「分からないところが残るとモヤモヤしたが，授業で聴きたいポイントがはっきりするので効果的な学習になったように感じる」，「自分で理解してやらなければならない分，難しかったところもあったが，自分のペースで進められるところはとてもいい」のように，メリットとデメリットを感じながら好意的に捉えようとする声も目立った。なかには「予習という感覚で自分で学習し，授業で実践的な問題を解いて理解を深めることができたので分かりやすかった」，「自宅でじっくりと理解を深めてから授業を受けることで，定着度が上がったと思う」としっかり分析したコメントもあり，正直なところ驚かされた。反転授業の対象とする学習内容については，「もっとも難しいトピックに限り希望する」，「単純なものならいいと思うが，難しい内容は通常の授業で学びたい」と正反対のコメントがあり，どう考えたものかと迷ったが，要するに複雑な内容の場合は対面授業のほうが学生は理解しやすいが，難しい内容であるほど，繰り返し参照できる教材が求められている，と考えればよいのだろう。

今回の試みでは比較対照する材料がないこともあり，反転授業の導入によって実際に受講生の学力が伸びたかどうかを判定することは難しいが，定期試験における成績は「秀または優の学生が多く，不可はゼロ」と極めて良好であった。少なくとも反転授業の導入はマイナスに働いておらず，むしろ理解を深める結果になったと考えてよさそうである。途中で脱落し，出席しなくなる学生も皆無であった。進度が速く，欠席すると挽回が困難になることは初級文法の授業の特長ともいえるが，その防止に役立つという副次的な効果も反転授業用のコンテンツには期待できるのかもしれない。

3. 現地学習サイトへの橋渡し

2年次以降の学習者に対しては数年来，「仏検」対策用の E-ラーニング教材の提供ならびに学習支援 Web サイトでの情報提供をおこなっていた。少しずつ模擬受験が可能な級を増やし，5級から準2級までに対応，準2級になると1次試験にも「書き取り」試験が加わるため，合否判定をすべて自動ではできないが，3級までとかなり出題傾向が異なるのを体験できるというだけでも少なからぬ利用価値があり，学習者が受験級を選ぶ参考となる。初年次から仏検に挑戦する学習者が毎年数名おり，その大半が次々に上の級をめざすという好ましい循環が生まれた結果，この2年間は10名を超える受験者をとりまとめて出願することにより，検定料が1割引になるのが珍しいことではなくなった。1次試験は市内で受験できるが，2次試験（面接）が課される準2級以上の団体出願者は高松や広島などの受験会場へ出向かねばならないため，団体出願していることを条件に「愛大 GP」の予算配分のなかから交通費補助をおこなったことも，受験生の増加に繋がったものと思われる。平成28年度には2名，平成29年度には6名が交通費補助を受け，2次試験の合格率は100%を達成した。受験者全体の年間合格率も平均84.3%（全国平均は約60%）と好成績が維持されている。

こうした学習継続者たちも，実際にフランスの協定校やその附属語学学校などで学ぶ段になると大いに苦労する。これはむしろ当然のことであり，衝撃を受けつつ「もっと勉強しよう」という向上心を抱いて帰国する者が多く，また十分なコミュニケーション能力がない自分を何とか助けようとしてくれた現地の人々に感謝し，こんどは手助けする側になりたいから，と進んで留学生のチューターを務めようとする学生が出てきたことは喜ばしい限りである。しかし現地に赴く前に「すべてフランス語」という環境を疑似体験しておくことも，現地での学習を準備し，限られた期間内に成果をあげるためには有用に違いない。ネット環境さえあればいくらでも体験できるだろうと思うのだが，例えば学習支援サイトにリンクを貼り，フランスで作られ公開されている語学学習や実力判定テストを利用できるよう案内しても，利用している学生はめったにいないのが現状であった[5)]。

そこで2年次以降の語学の授業履修者を対象に，半ば強制的な利用をさせてみようと考え，幾つかの Web サイトを仔細に検討したところ，なるほどこれでは敷居が高いだろうと思われる要素が少なからずあることに気づいた。多様なレベルのコンテンツが用意されており，レベル表記も日本人学習者には馴染みがないため，そもそもどこから着手したらよいかが分かりづらい[6)]。

まずは実力判定テストを利用することから始めねばならないのだが，このテストも一筋縄ではいかないことが多いのが現状であった。非常に完成度の高いテストで感心させられるが，60 分あまりかかるテストを中断・再開できないことが着手してみなければ分からないもの，愛媛大学の平均的な 2 ～ 4 回生にとっては難易度が高すぎて半分以上がまったく手も足も出ないだろうと思われるものなど，めざす道の遠さを思い知るには有効かもしれないが，実際に自分のレベルを知り，教材を活用する手がかりとするには無駄が多すぎる。最終的にこれならば何とか使えるだろうと思われたテストでさえ，ただ試してみるよう勧めるだけでは無理があるのだと改めて気づかされた。趣向を凝らした教材なのだが，フランスのポストのイラストを見ても黄色であるために郵便受けと取り違えそうになったり，住所や生年月日の表記に関する習慣を知らないために正解できなかったりすることが多いはずだ。むろんそうした知識を含めての「フランス語の実力」が判定される仕組みではあるが，現地体験がまったくない学習者の場合は自動判定の結果だけを見ると必要以上に落胆することになりかねない。せっかくの優れた教材を有効活用させるにはどうすればよいかを考え，導入の解説ならびに難しい箇所の補足説明をおこなう「橋渡し」教材を作成し，提供してみた。また，結果ならびに感想を「報告書作成コーナー」を設けて記入させ，個別にチェックし助言を与えることにした（図 5，6）。2 ～ 4 回生の受験結果をチェックしたところ，おおむね A1 から A2 レベルで，ほぼ実力を正確に反映した結果が得られていると判断できた。

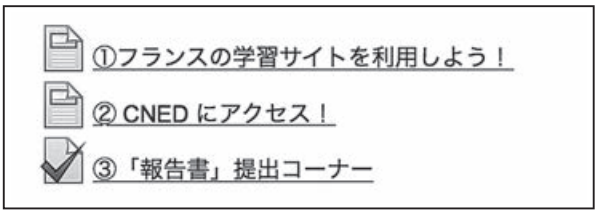

図 5　橋渡し教材（6 月）

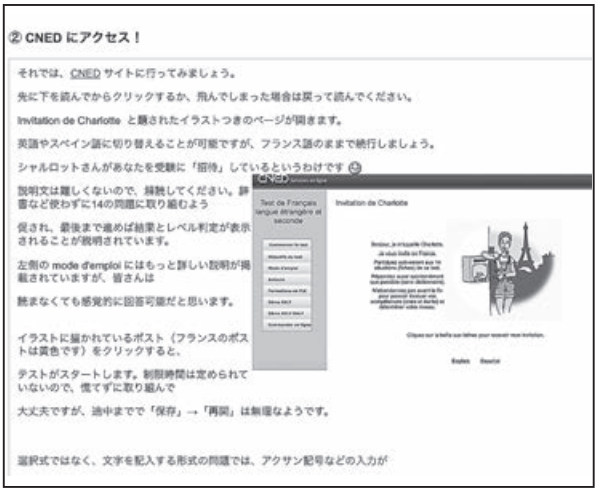

図 6　レベル判定テストの利用法説明

次のステップとして，フランスのテレビ局が運営している学習サイトへの橋渡し教材を用意した。教育テレビに相当するこのテレビ局は，日本でも有料でオンライン視聴が可能な放送を多数提供しているが，ニュースに限り無料視聴が可能であるため，その利用法についても解説を加えておいた。国際版サイトにも簡単なフランス語学習用コンテンツが置かれているが，本国サイトのほうには本格的なフランス語学習コーナーが設けられている。こちらの「フランス語能力テスト」は所要時間が長くレベルも高すぎるため，夏季や冬期の休業期間中などに腰をすえて取り組むことを推奨し，「レベル選択」から学習教材を学習者自身が選択して視聴するよう誘導した（図 7，8）。

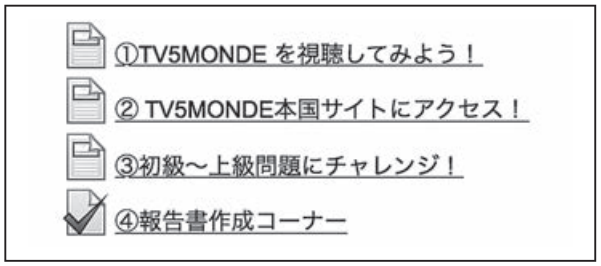

図 7　橋渡し教材（11 月）

図 8　本国サイトへの誘導

テレビ局だけあって，このサイトでは映像を駆使した実用的な教材が豊富に提供されている。A1 レベルから取り組みやすそうな教材を選んで利用させ，操作や解説の利用法にひととおり慣れさせる（図 9）。どの段階で文字に起こした文章を参照したり，辞書を用いることが望ましいか，といった助言も添えておいた。その後，各自のレベルや興味関心に応じた教材に進ませるが，A1 レベルの教材以外はそれほど懇切丁寧な造りではないうえ，不具合が放置されている教材，子どもの会話など大学生には聞き取り

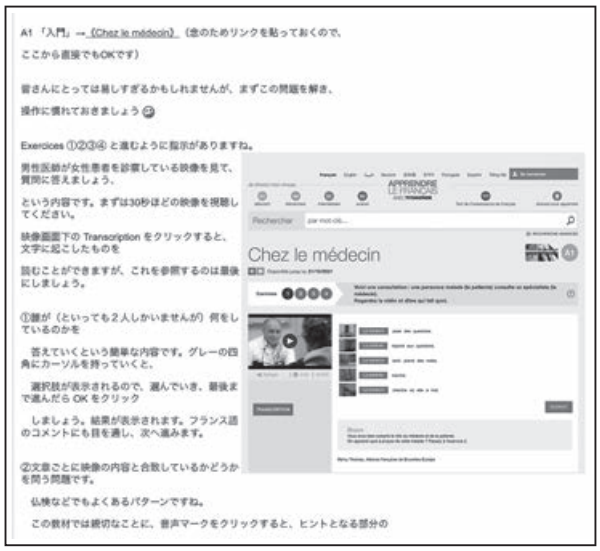

図９　ウォーミングアップ問題の解説

づらいと思われる教材なども混じっているため，各レベルから手頃な問題を１つずつ選んで愛大生向けの「推奨問題」とし，それぞれのヒントと，回答のしかたを示すことにした。レベルが上がると，複数回答可となっていることを見落とすと正解できない問題や，せっかく日本人学生にとって馴染みの深い画家ゴッホの伝記的ドキュメンタリーが素材なのだが，肝心の名前がフランス式に「ヴァン･ゴッグ」と発音されるため，何の話かさっぱり分からないまま設問に進みそうな教材なども混じってくるため，導入によりスムーズに利用させることができたのではないかと思う。むろん，「すべてフランス語」の体験を邪魔しないよう，こうした説明は最小限度にとどめた。

この教材についても「報告書作成コーナー」により，各自の取り組み状況のチェックと助言をおこなったが，その際の学習者のコメントをレベルごとに幾つか挙げておこう。

A1：「一度聞いただけではあまり分からなかったが，繰り返すと知っている言葉が聞こえてきた。専門的な用語もあり，難しいところは辞書をたくさん使わないと理解できなかった」（2 回生）

A2：「A1 とは大違いで，ほとんど聞き取れなかった。原因はリエゾンに慣れていない，ボキャブラリー不足，また英語でもよくあることだが，いちいち頭で訳すためどうしても長い文章になると最後まで聞き取れない。かなり自信をなくしました」（2 回生）

B1：「一度聞いて理解するには難しい文章だった。特に穴埋め問題は知らない単語があり，発音を聞いて推測することしかできなかった。理解できる文章があっても，前後のつながりの理解に苦しむことが多く，会話のスピードや流れについていく難しさを感じた」（3 回生，１ヶ月の語学研修経験者）

B2：「会話のスピードや，二人の声が重なりあう部分に全くついていけず，半分ほどしか正解できなかった。トランスクリプションを印刷してみたが，目で追うのがやっとで内容まで入ってこなかった。キーワードを予測して部分的に訳して，やっと少し内容がつかめた」（3 回生，引率型研修の参加者）

受講生の大半がフランス言語文化の専攻生であり，「仏検」準２級以上の合格を目指していること，フランスでの語学研修や中長期の留学を経験ずみもしくは今後に計画しているなど，極めて学習意欲の高い学生たちだからこそ繰り返しチャレンジして相応の成果をあげたのであるが，少なくとも初めの一歩に関しては橋渡しのコンテンツを提供しなければスムーズな利用はできなかったであろう。逆に言えば，導入にさえ成功すれば，後は学習者が自力で訓練を重ねることが可能となる無料の教材が少なからず存在するわけで，「すべてフランス語」の準備体験として，現地に行くことの難しい学生の場合はせめてもの疑似体験として，有効利用できるという手応えが得られた。

4. 今後の課題と展望

ICT を活用する環境が当たり前のものとなった現在，E-ラーニングの利用は学生にとって身近な学習形態として定着しつつあり，授業の一環として位置づけてもほとんど抵抗感なく利用されるようになった。今回のプロジェクトにおいては，筆者が数年来提供してきた時間外学習用のコンテンツから一歩進める形で，反転授業という思い切った試みに踏み切ったが，初めて経験した受講生からも概して好意的に受け入れられたばかりか，高校で経験したのと同じやりかただったので使いやすかった，とコメントする学生まで混じっていた。まさにネオ・デジタルネイティブ世代の若者たちを相手にしているのだと実感させられる。

こちらが PC での視聴を想定して作成した E- ラーニング教材を多くの学生がスマートフォンで視聴していることも，「紙媒体の教材のほうが見やすい」，「E- ラーニング教材は小さくて見づらい」という感想が出てくる原因なのであろう。学習支援サイトの構築にあたっては，レスポンシブ Web デザインを採用する配慮をしたものの，Moodle を介して提供する教材についてはスマートフォンでの学習をあまり意識してこなかった。音声教材での発音練習や動画教材の視聴などの場合にはスマートフォンでも特段の支障はないと思われるが，反転授業用に作成したコンテンツはさぞかし見づらいことと思われる。むろん自習室や自宅の PC，せめてタブレット端末を利用することを推奨すると授業中に繰り返し伝えているが，受講生にしてみれば手軽に取り出せるスマートフォンでの視聴が第一選択となるらしい。この問題に関してはどのような解決法がありうるのかを探る必要があるだろう。もともと学習意欲の高い 2 年次以降の学習継続者に対しては，「効果的に学ぶために

は大画面のデバイスを使いなさい」と指示するだけでも足りるが，初年次の選択必修科目としてフランス語を学ぶ学生たちの場合，とりわけ頻回の利用を義務づける場合には，敷居を低くする工夫も大切に違いない。

反転授業については，本当に効果があるのかどうかを客観的に判定することも今後の課題である。比較対照する実験などおいそれと実施できそうもないので，あわよくばフランス語での実施報告が続々と現れることを期待しつつ，英語教育など近い領域での成果にも注目していきたいと思う。いずれにせよ，反転授業用のコンテンツが復習や欠席者救済のための教材として威力を発揮することはまず確実と判断できる。反転授業をおこなう適切な頻度を探りながら，従来型の授業と柔軟に組み合わせていけるよう E- ラーニング教材の拡充を図ることはぜひ継続していきたい。

本プロジェクトにおける取り組みは，愛大 GP に採択されることがなければ，せいぜい試してみる段階にとどまり，本格的な実施に至らず終わっていた可能性が高い。曲がりなりにも実際の授業に取り入れ，ある程度の検証に漕ぎ着けたこと，学生の現状について認識を改める機会ともなったことは筆者にとって意義が深かった。E- ラーニングのありかたも今後さらにめまぐるしく変化していくことが予想されるが，新しいものが良いとは限らないことは念頭におきつつ，さらなる授業改善の可能性に対しては常に貪欲でありたいと思う。

註

1）プロジェクト名は，「基礎フランス語」等で活用する E- ラーニング教材の開発。平成 28 年度愛媛大学教育改革推進事業（愛大 GP）種目 3 に採択され，平成 28 年度に 410 千円，平成 29 年度に 397 千円の配分を受けた。

2）このプロジェクトのうち，文法の授業用の教材開発については，柳　光子（2017）「フランス語 E- ラーニング教材開発の試み―文法ならびに仏検対策編」，『大学教育実践ジャーナル』15，105-111 に報告をまとめている。

3）反転授業を導入しようと計画した時点でフランス語教育での導入例はほとんど報告されておらず，2017 年になってわずかに事例が見受けられるようになった。Cf. 武田裕紀（2017）「フランス語における反転授業の取り組み報告」，『追手門学院大学基盤教育論集』4，39-42. ／岩根久（2017）「フランス語初級文法クラスのプチ活性化」，森朋子・溝上慎一編『アクティブラーニング型授業としての反転授業 =Flipped Classroom for Active Learning 実践編』，ナカニシヤ出版，127-137.

4）反転授業に関する論文も近年増えているが，その定義や目的の考え方には幅があるように見受けられる。本取り組みにおいても，対面授業での協同学習の実施等には拘泥せず，「反転」による授業の効率化が実現すればよいと考えることにした。

5）筆者とエリック・モヴェ教員とで運営している愛媛大学フランス語学習支援 Web サイト（URL： http://afa.ll.ehime-u.ac.jp）は「愛大，AFA」で検索可能。「リンク集」ページに国内外の学習サイト等の案内がある。

6）フランスでは外国人のフランス語学習者に対し，A1 : débutant（初学者），A2 : élémentaire（初級），B1 : intermédiaire（中級），B2 : avancé（上級）と区分するが，単に A1，B2 などと表記されている例が多い。